続 徒然つれづれ

常に前向き

桑野　巍

私はお陰様でどうにか元気で過ごしていますが、年齢の程もありまして諸事行き届かぬことが多くなり、また右手拇指の腱鞘炎も加わり、文字も思うように書けなくなりました。つきましては、来年以降の年賀状によるご挨拶を欠礼させていただくことに致しました。

昨年秋、90歳を迎えられた先輩から寂しいようなわびしいような葉書を頂戴した。長年ご指導を賜り、お付き合いをいただいた先輩は年賀状のやりとり中断を決断されたのだ。早速彼の自宅に電話を入れた。年賀状中止の話は省いて「お元気でしょうか」とご機嫌伺いしたら「普通の生活しているよ」と元気な声がはね返ってきたので安心した。

年賀状は毎年600枚出していたが、住所氏名の表書きだけでも大変だったんだ、と述懐した。右手指だけでなく白内障の手術や甲状腺の異常などに加え、自分に落ち度のない交通事故に遭遇し、その時胸を打って胸骨骨折で２カ月間入院したりで、警察官から「まだ車に乗るんですか。もうやめて下さい」と諌められたり、“なにくそ”精神が薄れたそうだ。自分自身の五感も鈍ったし、運が悪いことに２歳年下の連れ合いが軽い認知症で、ぼくが“横老老”の介護人、卒寿の祝いどころではないというのだ。

それでも体力維持のため自宅庭でラジオ体操し、毎週カラオケ教室に通っているという。なのに膝や腰が弱くなり、歩きが遅くなったと嘆き「グリップが弱まって好きなゴルフができないのが残念。情けないよ」とおっしゃる。

先輩は満州（現中国東北部）で終戦を迎え、戦後４年間ソ連に抑留、帰国後大蔵省近畿財務局に復職した。その後金融機関の幹部に転職、70歳を区切りに地元の商工会議所会頭など公職のすべてを辞した。引退後は地域の世話役をこなしつつ悠々の生活を楽しんでいる。「この歳になって、もう自分の出番はなくなった」といっていたが、それでも地元の小・中学校からの依頼で「戦争の惨しさ」を話すことも度々あった。

学校で話すと児童生徒は熱心に聞いてくれて嬉しいが、子どもたちがどれだけ理解してくれているかは読み取れないといいながらも、澄んだ眼は真剣で、相づちをうってくれるのは頼もしいという。ところが、地域社会の世話役は難しかったらしい。公共心、愛郷心、貢献心、我慢・辛抱という言葉や文字はここでは通じなくて、わがまま、利己心が横行し「自分だけよければ」という考え方が強く「ぼくは何度も投げ出したくなった」と世話役時代を振り返っていた。また最近「協働」という言葉がしきりに使われているが、残念ながら言葉が先行気味で、現実は協働にはほど遠い現象が目立ち、住民たちは「あれは役所がやってくれる。これも役人がやるべき」が多くなっている、という見方をしていた。

青年時代は軍国主義にまみれ、ソ連で共産主義と出会い、戦後の日本に帰国してみれば民主主義に急変していて、先輩は戸惑ったという。地域の世話役時には「自由主義とはなんぞや」にぶつかり、自由を履き違える若者にも遭遇したとおっしゃる。「ぼくはニュースを見聞きするのが好きでね」という先輩は携帯電話を操る高齢者の一人だが、情報が氾濫しているせいか世相の動きは瞬時にわかるといい「これでいいのか」という事象が多過ぎて困るとも感じておられる。

中央政府や政治の動き、官僚たちの魑魅魍魎（ちみもうりょう）ぶり、地方政治の腑抜け状態にもご不満があるようで、本当に国民、住民のことをおもんばかっているとは到底思えないと厳しい。「まあ行きつくところまで行かないと目が覚めないだろうよ。この国の国民は。これが結論だよ」とおっしゃった。

先輩をからかうような発言は無礼そのものだが「120歳ぐらいまでは大丈夫。私には真似は出来ないけれど」といったら「ぼくはまだまだ元気。なにくそ精神を持ち続けているよ。常に前向きだよ」に圧倒された。マスメディアが団塊世代の大量退職で老いの時代が始まったとの見方報道をいやがり「だから敬老の日は不必要」との主張だ。先輩のこの若さはどこからきているのか、肉体的精神的な健康行為の実践からか。私はすべてを学びたい。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）